

氏名(国籍)	チャイチャルン スマリー (タイ)		
学位の種類	博士(教育学)		
学位記番号	博甲第2484号		
学位授与年月日	平成13年3月23日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
審査研究科	教育学研究科		
学位論文題目	EFFECTIVE MEDIA-UTILITY IN LEARNING (学習メディア利用の有効性に関する研究)		
主査	筑波大学教授	博士(教育学)	渡邊光雄
副査	筑波大学教授		川合治男
副査	筑波大学教授	博士(教育学)	清水一彦
副査	筑波大学助教授	理学博士	吉江森男
副査	筑波大学助教授	博士(心身障害学)	四日市章

論文の内容の要旨

1. 研究の目的

本研究の目的は、学習メディア利用の有効性を授業で解釈するための理論的枠組みを文献解釈と調査分析の結果から構成することにある。教育場面で教師が利用するテレビ、コンピュータ、テキスト、ノート、レクチャーなどのメディアは、教育目メディアとして一般的に捉えられるが、それを学習者の立場から捉え直した概念が「学習メディア」である。

学習メディア研究では、従来、「テレビ視聴」「コンピュータ利用」「読解」「筆記理解」「レクチャー」という学習メディア活動の有効性を解釈する理論的枠組みが、学習メディア活動に対する「先有知覚(学習メディア活動に対する学習者の受け止め方: 利用し難しさ、好み、学習への期待、好奇心)」「心的努力(学習者が学習メディア活動に費やす精神的活動の程度)」「成績(学習メディア活動による学習成績)」の構成要因から成るものとして提唱されてきた。しかし、その理論的枠組みを実際の授業に適用しその実用性を確かめる研究は進んでいない。この状況の中で、本研究は、実際の授業を対象にして学習メディア利用の有効性を解釈し得る理論的枠組みを提案するために、先行研究の成果に基づき、学習メディア活動に対する「先有知覚」及び「心的努力」の他に「メンタル・モデル」「価値づけ」「価値観」を「成績」と共に構成要因とする理論的枠組みを構成し、その実用性を授業で確かめようとするものである。

2. 研究の方法

本研究では、まず、学習メディア利用の有効性の解釈に関して、先行研究ですでに規定されている「先有知覚」及び「心的努力」以外に、「メンタル・モデル」「価値づけ」「価値観」を文献解釈から特定し、それらを要因として理論的枠組みを構成する。そして、その理論的枠組みが実際の授業に適用され得るものであるか否かを確かめるために、学習メディア活動の種類とそれをいとなむ利用者の年齢層を米国等の先行研究に倣って規定し(学習メディア活動: テレビ視聴, コンピュータ利用, 読解, 筆記理解, レクチャー; 利用者: 第5, 9学年生), そして、教科特性の異なる算数・数学, タイ語, 社会科の授業で上記の学習メディア活動を営む小学校5年生と中学校3年生へのアンケート調査の結果から相関係数を求めて諸構成要因の間の関係を解釈し、また、面接調査(100

名)を行って諸構成要因間の影響関係を解釈する。これらの解釈に基づき、学習メディア利用の有効性を解釈する理論的枠組みが実際の授業に適用し得るものであることを確かめる。

3. 論文構成

論文は、六つの章から成る。第1章では、研究目的及び研究方法の記述と用語定義が行われ、第2章では、学習メディア利用の有効性に関する問題の背景として、教える側から学習を促進する教育メディアの有効利用に関する従来の研究がまとめられている。第3章では、学習メディア利用の有効性の解釈に必要な要因が先行研究及び関連文献の解釈から特定された上で、その有効性の解釈のための理論的枠組みが構成され、第4章では、その理論的枠組みの実用性を確かめるために、教科特性の異なる算数・数学、タイ語、社会科の授業で各種の学習メディア活動(テレビ視聴、コンピュータ利用、読解、筆記理解、レクチャー)をいとなんだタイの児童生徒へのアンケート調査(小学校5年生602名、中学校3年生559名)から、各学習メディア活動における「先有知覚」「心的努力」「価値づけ」「成績」の相関関係が考察され、面接調査(小学校5年生50名、中学校3年生50名)からは「メンタル・モデル」と「成績」との関係が解釈されている。そして、第5章では、とくに学習メディア活動に対する「先有知覚」及び「メンタル・モデル」と「成績」の関係について、タイ人の「価値観」(文化的要因)との関わりからの解釈が行われ、第6章では、本研究の成果とその意義がまとめられている。

4. 研究の成果

本研究において、学習メディア利用の有効性を解釈するために必要な理論的枠組みづくりの構成要因に関しては、学習メディア研究の分野で従来提唱されてきた学習メディア活動に対する「先有知覚」「心的努力」「成績」の他に、学習メディア活動に対する「メンタル・モデル」「価値づけ」「価値観」を構成要因として加える必要があることを、文献解釈とアンケート調査及び面接調査の分析に基づいて主張すること、また、これらの要因から構成される理論的枠組みが学習メディア利用の有効性を実際の授業で解釈し得るものであることを主張することができる。そこでは、タイの小学校5年生と中学校3年生を対象とした算数・数学、タイ語、社会科の特定の授業においてではあったが、学習メディア活動による「成績」は、学習メディア活動に対する「先有知覚」「心的努力」「メンタル・モデル」「価値づけ」と共に、文化的要因としての「価値観」によって影響されるものであるとの結論が導かれている。

学習メディア活動による「成績」は、従来、学習メディア研究では、「先有知覚」あるいは「心的努力」との関わりで解釈されてきたが、実際の授業において学習メディア活動による「成績」を解釈する場合、「先有知覚」に基づく「心的努力」と「メンタル・モデル」との関わりで解釈することを軸にして、さらに「価値づけ」「価値観」との関わりで解釈するという理論的枠組みが必要になる。この理論的枠組みを授業に適用して学習メディア利用の有効性を解釈するとき、学習メディア活動に対する「利用し難しさ」及び「心的努力」の程度が低くて「好み」「学習への期待」「好奇心」の程度が高い「先有知覚」の状態と共に、「価値づけ」の高さが「成績」のよさに連なるにしても、それは、「レクチャー」(中学3年生)の場合には、さらにタイ人の「価値観」(「年長者に対する尊敬」「他人との協調性)」に基づく「レクチャー」への「学習への期待」との関わりで解釈され、また、「筆記理解」(小学校5年生算数)の場合には、さらに「心的努力」の程度の高さと関わりで解釈される。そして、「コンピュータ利用」(中学校3年生数学)の場合には、利用中の理解できない学習内容を理解できるまで繰り返して見ることができるという「コンピュータ利用」それ自体に対する「メンタル・モデル」との関わりで解釈される。授業における学習メディア利用の有効性に関しては、このような解釈が必要とされるのである。

審査の結果の要旨

従来の学習メディア研究では、学習メディア活動の有効性が「先有知覚」や「心的努力」という要因との関連で分析されていたが、本研究は、さらに「メンタル・モデル」「価値づけ」と共に文化的要因としての「価値観」を加えてその有効性の解釈のための理論的枠組みを構成し、それを実際の授業に適用して学習メディア利用の有効性を分析・解析した点に独自性を有し、その独自性には学習メディア研究の斬新性がある。

ただし、その分析・解釈は、文献解釈から特定した諸要因の間の関係について、その相関関係と面接調査結果に基づいたものであり、因果分析に基づいたものではない。従って、本研究は、実証的研究というよりも、調査分析で補完した解釈学的研究であるといった方がよい。また、文化的要因としての「価値観」との関連による解釈の部分は、タイに限定されているため、解釈の狭さがあるが、その点は、本研究が学習メディア研究の新しい効果研究の在り方を求めているものであるということから、止むを得ないであろう。本研究は、その主要部分がタイの総合学術誌 *Journal of the National Council of Thailand* (1997) と教育メディア研究の国際的な学術誌 *Educational Media, Inter-national* (1999) に掲載され、国内外の教育工学研究者から高い評価を受けており、それに基づいて作成された本論文は、博士（教育学）学位論文の水準に十分に達していると判断される。

よって、著者は博士（教育学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。